



目次

特集 〈外国にルーツを持つ子どもたちの今！〉その2 (117号継続) 「ちょっとここがわからないんですが」 浦山太市 1	特集 〈外国にルーツを持つ子どもたちの今！〉その2 子どもたちの継続的な学習を支える仕組みづくりを 遠藤由紀夫 6 コミュニティとともに歩む学習支援 吉村多恵子 7
寄稿 アジア、アフリカの視覚障害者のリーダーを育てる 石原博明 2	Information 事例報告会／総会のお知らせ(事務局) 3
世界の国から キルギス共和国 サマツ 3	コラム 「Pay Pay」 岡田美奈子 8
紙上講座 「おじさんが気になる最近の日本語の新しい傾向」 金子広幸 4,5	



特集 外国にルーツを持つ子どもたちの今！ その2

「ちょっとここがわからないんですが…」

「なかよし」 浦山 太市



〈はじめに〉

東京の東端、葛飾区。下町の人情風土の濃いローカルな場で見聞きし体験していることの一端です。東京全体、全国に敷衍はできませんが「子ども」としての根っこそのものは変わらないと思い報告させていただきます。

私たちの「なかよし」は、特にホームページはありません。区（文化国際課や指定管理者国際交流担当係）で作成、発信しているホームページ、ボランティア日本語教室の情報が広報代わりです。また区の「子ども応援課」や、「かつしか子ども若者応援ネットワーク」の支援も大きな活動の力になっています。

〈学びの様子、どんな子どもが学んでいる〉

学びの会場は区内の公共施設。今は3会場で、毎土曜日と月2の日曜日の午後開催。他団体との関係で会場は不定。「〇〇先生からの紹介で…」 「役所の担当の方から、ここに相談してみてください、と言われ、連絡しています。」 「区の日本語ボランティア教室の表を見て連絡させていただきました。」 「今、5歳です。小学校はどこの学校がいいですか。」 「見学はいいですか。…はい、いつでもどうぞ。」

基本はマンツーマンで、その子に合った学習。毎回来ている子は、個人カルテをもとにスタッフが前回の続きを学

習するのですが、具体的に「ちょっとここがわからないんですが」とか、「今日はカタカナの勉強を中心をお願いします。母」とかの言葉やメモを示す子もいます。

小・中学生が中心で、時には幼、高校生や帰国子女も来ます。出欠は各人の部活動や学校行事の都合で来ますので、多い時は10数名、少ない時は数名です。コロナ禍中でも学校開業中は教室も開室（土・日曜／春・夏・冬休み）を原則としました。コロナ中は参加者2,3名という時もありました。

学習生徒は最近増えている中国ルーツの子が8割、2割はネパール、バングラディッシュ、フィリピン、インド、ギニア、パキスタン等。登録数（幼、高校生も含め）30余名。その中で最近の教室参加者は小学生が目立ちます。

日本語を学ぶ子、それがあ程度日本語が解るようになると大半の子は教科の学習も求めてきます。教科を通しての日本語学習が主に…。思えば、平日は日本の学校で日本語の教科書を使っている日々です。進学…悩みは大きい。多くは「言葉」のハンディと日々奮闘している。何とかできないか…。そして何とか苦勞し希望の高校へ。

中学生の時来日。高校生になったが、その先の進路に悩み相談に。また高3の春、N2合格した、N1に挑戦したい、と来た子も。ここで学んだ大学生がボ

ランティアやりたいと訪ねてきた…。嬉しいことです。

〈ボランティアスタッフ〉

約20余名が登録しています。元・現の会社員、教員等公務員、また主婦等です。活動が土・日曜日ですので学生（大学生、高校生）もいて、大いに助かっています。区の日本語指導講座や大学等で指導法を学んだ有資格者も10名程います。それぞれ忙しい身ですので、各自の都合に合わせて来ます。大人対象の日本語教室だと「学びたい」が先行し教えやすいのですが、子どもは違います。家族に追いついての来日。「なんで日本語を…」複雑です。共に学ぶ、子どもの気持ちに寄り添う、子と親の願いを何とか叶えてあげられないか、という姿勢が欠かせません。そんな人達が集まっています。中には中国語、英語の堪能なスタッフもいて有難いです。

〈終わりに〉

少人数でもいい、その方が小回りが利く。無心に親身に関われる。時には、（進路や就職が必要なら）一緒に動くことも大事にしよう。つまりいた時あそこに行けばあの人たちに会える、いつでも行ける、ヒントをもらえる。此処が巣立ち行く子たちの、言わば「母船」「居場所」。再来室歓迎。そんな場でありたいと思う今日この頃です。

アジア・アフリカの視覚障害者のリーダーを育てる

寄稿

石渡 博明

社会福祉法人 国際視覚障害者援護協会 理事長



私どもは、発展途上諸国から視覚に障害のある若者の日本留学を支援している団体で、これまで19の国と地域から、89人の若者を招聘してきている。

留学候補生は10月1日前後に来日、板橋にある舟橋記念会館に6ヶ月泊まり込んで、日本語・日本点字、白杖を使った歩行訓練および生活訓練を中心に、日本社会の紹介や施設見学等を実施、翌年4月からは盲学校高等部専攻科で鍼・灸・マッサージ（三療）を3年間学習し、毎年2月末に行われる三療の国家試験に挑戦する。

近年は各国でも視覚障害者の職域が広がってきていて、弊協会の留学生でも情報システムを目指す人も徐々に始まってきているが、基本は三療学習である。それというのも、視覚障害者は目は見えなくとも触覚が鋭いという特性を生かして、国によって違いはあるものの、マッサージによって生計を維持しているケースが多く、視覚障害者の職業と言えばマッサージという国や地域が多いからである。

一方、国際障害者年、障害者の権利条約、SDGsとか、インクルージョン、バリアフリー、ユニバーサルデザイン等々、障害者を取り巻く環境は世界的に改善されつつあるが、日本と発展途上諸国では依然として大きな格差が存在し、日本へ留学に来ることの意味は大きいと言えよう。にもかかわらず、視覚障害者の日本留学—学習や研修を支援するシステムは極めて貧弱で、ダスキン愛の輪基金によるアジアの障害者リーダーの育成・研修事業と、私どもの視覚障害留学生招聘事業の二つしかなく、二つの事業を合わせても年間2～3名しか日本に来ることができないという厳しい現実がある。

そうした状況に追い打ちをかけるかのように、2000年以來、文科省から交付されてきた雀の涙ほどの補助金（年間400万円弱）が、「日本の国益に資していない」という言いがかりとしか言えないような筋違いの

理由で、補助金が2018年度から廃止になってしまったのである。日本と各国との橋渡しの人材、アジア・アフリカの視覚障害者のリーダーを育ててきたにもかかわらず、である。

そのため、弊協会の基幹事業である視覚障害留学生招聘事業は継続が困難となり、一時は事業廃止の瀬戸際まで追い込まれてしまったが、発展途上諸国の関係者からは元より、日本国内でも事業継続を望む声が大きく、かろうじて持ちこたえてきたという現状にある。

とは言え最大のネックは、もちろん事業継続のための資金であり、盲学校入学前6ヶ月の予備研修を支える人材の確保である。資金の問題は依然として厳しい状態にあるものの、盲学校の先生のご紹介で助け船を出してくださったのが、TNVNのHさんであった。聞けば、私どもの協会との縁は今回が初めてではなく、諸般の事情で実現しなかったものの、30年も前に接点があったとのことで、浅からぬ縁を感じた次第である。

お蔭様で、来日前の段階からZoomを使って日本語学習を進めてきたマレーシアのファイズさんは、経費の関係で来日が11月末になってしまったものの、何とか日本語学習を継続することができ、去る1月19日に行われた筑波大学附属視覚特別支援学校（筑波盲学校）の入学試験に無事、合格。4月の入学に向けて、日本語学習の支援を継続中である。

視覚障害者の日本語学習の相談に応じることができるのは、日本で私どもの協会が唯一という厳しい現実があり、近年は日本留学だけでなく、日本語を学びたいという海外在住の視覚障害者が増えてきていて、弊協会に対しての問い合わせも増えてきている。視覚障害者の日本語学習というマイナーな領域だが、何とかして受け皿としての役割を果たし、海外からの日本語学習の期待に応えていきたい。厚かましいお願いとは思いつつも、本紙をお読みになっている皆さんにも、この場をお借りしてご支援、ご協力を切にお願いしたい。



キルギス共和国

筑波大学附属視覚特別支援学校（筑波盲学校）

サマツ

私はキルギスから来たサマツです。24歳です。今、筑波大学附属視覚特別支援学校高等部鍼灸手技療法科の2年生です。私は16歳の時、骨髄炎と水疱瘡にかかって目が見えなくなり、現在、両眼ともほとんど見えません。

キルギスでも視覚障害者はマッサージの仕事をしている人が多いです。私は国立医療大学の視覚障害者のためのマッサージコースで勉強している時、先輩から日本の盲学校の教育はキルギスよりずっと進んでいると聞きました。それで、ぜひ日本で鍼・灸・マッサージを勉強したいと思って、先輩たちもお世話になった国際視覚障害者援護協会にお願いして、日本へくることができるようになりました。

皆さん、キルギスを知っていますか。キルギスは中央アジアのシルクロードの途中にあって、昔から大事な場所でした。東は中国、南はタジキスタン、西はウズベキスタン、北はカザフスタンに囲まれた内陸国で、海がありません。でも、日本の琵琶湖の8倍の大きさのイシクル湖という名前の湖があって、中央アジアの真珠と呼ばれています。

キルギスは山国で、一番高い山は7432メートルもあります。富士山のだいたい2倍の高さです。キルギスには、世界最大の胡桃の森があって、面積は60万ヘクタールもあります。私もキルギス人も胡桃が大好きです。

首都はビシュケクで、海拔800メートルの所にあります。私が日本へ来る前に住んでいたところです。四季があって、春と秋はいいですが、冬は日本よりずっと寒くて、夏はとても暑いです。キルギスの人口は約700万人、東京の人口の半分ぐらいです。交通手段は地



サマツさん

下鉄や電車がなくて、人々はバスやタクシーや車で移動します。

キルギスには、キルギス人、ウズベク人、カザフ人がいて、共通語はキルギス語です。せっかくですから、キルギス語を覚えてください。「ありがとう」は「ラフマツ」です。「どうもありがとう」は「チョーン、ラフマツ」です。簡単でしょう？

人びとの宗教は、ほとんどがイスラム教で、アルコールは飲まないし、豚肉も食べません。町では、ほとんどの人がアパートやマンションに住んでいますが、田舎へ行くと、昔と同じように、ユルタという移動式の家に住んでいる人もまだたくさんいます。キルギスの国旗のデザインは、このユルタの天井の窓の模様が使われています。



キルギス共和国の国旗

人びとの主食はパンで、ナンと言います。皆さんはナンと聞くと、インド料理のナンを思いだすかもしれませんが、でも、キルギスのナンは違います。直径が30センチから40センチの円いアンパンのような形をしています。スープにつけたり、ジュースといっしょに食べたりします。

ナンのほかにも、キルギス人は、麺やご飯もよく食べます。ご飯はプロフと言って、イタリアのピラフと同じです。麺はスープがあるものも、スープがないものもあります。私はシャシリクという羊や牛肉の串焼きが大好きです。日本の焼き鳥の串よりずっと大きくて、長さが40センチから50センチぐらいの金属製の太い串に肉を刺して焼いたもので、塩味でとてもおいしいです。

キルギスは自然が豊かで、山も湖も、きれいな所がたくさんあります。人々もとても親切です。皆さん、ぜひ旅行に来てください。歓迎しますよ。チョーン、ラフマツ！！

おじさんが気になる 最近の日本語の新しい傾向

日本語教師 金子広幸

紙上講座

クラスでは、我々母語話者が、その表現を使っているときの心情、ニュアンスを学習者に伝えるべく、その表現を使っている人の心情を理解するタスクを宿題にしています。学習者たちは、その表現の向こう側にある背景を深く理解してくれます。

頼りにしたいのは母語話者の感覚なのですが、そこには昭和30年代生まれの私（以下おじさん笑）が、こだわりとなる現象があります。

最近よくあるのが「了解です」「なるほど」です。本来は、目上には使えなかったはずでしたが…。仮に「了解いたしました」と言ったところで、「了解」という言葉の無機質な印象が、敬意を排除しているような気がします。（中国語で「了解」という言葉は日本語のニュアンスよりは丁寧で、単純に「わかりました」の意味で使われているようです）

では、それに代わる丁寧な言い方は？です。ここが問題です。

「かしこまりました」や「承知いたし

ました」はやはり丁寧すぎますよね。だから若い人たちは「わかりました」に代わる新しい形として、「了解しました」と「テキトーにてーねー」な言い方を、使うようになったのかもかもしれませんね。指示があったときにその内容がわかったら、どう言うか、私は「わかりました」で十分丁寧だと思います。

この「丁寧に話したいけれども、丁寧すぎるのは良くない」という心理が、現代日本語社会のどこかに生じた気がします。

他におじさんが気になるのは敬意の方向性です。これが、おじさんの感覚とは、ずれてきている気がします。真に話中の人に対して敬意を添えて話す場合に使う言葉だった尊敬語・謙譲語が、（状況A）やがて鄭重語の一種として使われるようになり、（状況B）それがさらに、進んだ形が見られるようになりました。（状況C）

（状況A）隣の山本さんは、窓を開けていらっしゃいます。隣の山本さんのうちの窓は、いつも開けられています。

【これは受身文です。それを一つにしようと思ったのか…↓】

（状況B）隣の山本さんの家の窓はいつも開けられております。【どうしてここに謙譲語かな～？とおじさんは思います。「開けられています」じゃだめ？】

（状況C）隣の山本さんの家の窓は開いております。【どうしてまたここに

謙譲語かな～？とおじさんは言いたい】

隣の山本さんの家の窓は開いていらっしゃる？？【キター！ここには尊敬語？？】

状況Bの中に挙げられている例では、本来謙譲表現だった「ております」を、「話全体の雰囲気をも高めるために」鄭重語として使用しています。これは現代の日本ではよく使われている表現で、特に誤用とは認識されていません。（おじさん自身は本当は抵抗がありますが）

状況Cの例は、文字としてここで読むと、極めて違和感がありますが、実はこれ、2022年10月から年末までの間に、テレビの中の人が言った発言例です。他にもあります。

■このビルには担保が付いていらっしゃいますので、問題ありません。（ドラマの一場面）

■この番組をお聴きになって元気が出ていただけたらいいと思っております。（ラジオ番組）→【元気になっていただきたい】だったらいいんですけどね…。

■司会、大変でしょう？この番組、11年も続いていらっしゃるんですよ。（テレビの対談番組）

■首と背中が凝っておられました。（ドラマの一場面）

■顔が俳優に向いていらっしゃいます。（ドラマの一場面）

■多くのお客様がご利用いただいております。（駅の録音放送）

■社長には急ぎの用が入られました。あ、社長！そろそろ用事が入られます。（ドラマの一場面）

■

X：最大の問題はこの危険な容疑者を誰が逮捕に行くかなんだよなあ。
Y：署長！私が逮捕いたします！（ドラマの一場面）

以上の例ですが、基本的には台本が存在するドラマや対談番組の場面です。つまり台本を書く段階で、このおじさんの違和感には配慮がないということですね？

この文章をお読みの読者の方の中にも、「ご用事はお済みでしょうか」や「ご注文はお決まりでしょうか」に抵抗感がない方も多くおいでなのでは？敬語のシステムを意識して考え直すと、本来は「ご用事はお済ませでしょうか」「ご注文はお決めでしょうか」というように「他動詞」を使って言うべきですが、実際にこう言っている人は少ないですね。自分が入れたお茶でも、「お茶が入りました」などと言うように、自動詞を優先して使うことが意識されているのかもしれない。「顔が俳優に向いていらっしゃいます」の例も、相手の顔なのに「お顔」とは言わずに、「向いている」という部分の「いる」に、尊敬語「いらっしゃる」を使って表現することで、丁寧さ（つまり、鄭重さ）を示そうとしているんですね。（なんか違う気がする～）

さてさて、しつこいおじさんはまた気になったところに出かけて行きました。以前の号に書きましたが「でございます」についてです。

関東の一等地を、渋谷から横浜に走り抜ける東急線。九品仏から自由が丘に戻るとき、大井町線の放送を聞きました。「自由が丘、自由が丘でございます。渋谷、横浜方面、お乗り換えです」

実はこの「でございます」と「です」の使い分けに微妙な配慮があることに改めて気づきました。大井町線に乗って、今まさに到着した「自由が丘」という駅に対しては「でございます」を使い、それ以外の部分に関しては（おそらく意識的に）「です」を使っていることに注目すべきです。「まもなく渋谷です。JR各線、東京メトロ各線はお乗り換えです。渋谷の次は新宿三丁目です。」と「でございます」を使っていない部分があることも大切なポイントです。つまりしっかりと強調したい部分には、（わたくしどもの私鉄の会社様が提供するサービスによって、お客様が到着された駅）「自由が丘」「でございます」と使っているのですね。ここに「テキトーにてーねー」な言い方の心理が働いたら、「自由が丘になります」などと言うのかもしれませんが。でもこれには「上から目線」感覚がありますね。NHKの「ブ●タモリ」という素敵な番組に出ていらっしゃる、専門家の先生方は、ご自身の専門のことをおっしゃる時よくこの「～になります」をお使いです。専門家が周囲に提示する場合は許されることなのかもしれません。

ちなみに、東急線の先のみなとみらい線、ほかのJR線では、すべての放送で「です」でした。

まだあります。「あります」の尊敬語をどうするかです。人に対して本来謙譲語の「ございます」は使えないはず。でも「袋ございますか」「いらっしゃったことがございますか」と聞く人もいますね。…どうしましょう。

言葉は生き物、だんだん変わっていくんですね。（おじさん、ため息～）日本語教師になった頃、先輩の教師たちが、形容詞に「です」をつけた

言い方に抵抗があると言っていました。「おいしいです」や「大きいです」は当時は新しい言い方だったんですね。「おいしゅうございます、大きゅうございます」が本来の形だと。

クラスに話を戻しましょう。学生たちには「敬語の使いすぎは良くない。ハイライトマーカーのように効果的に使え」と言っています。要所に「敬語スタイル」を使えば、「ですますスタイル」は、実は敬語の一種だから、ほかは「ですます」で話しても失礼ではないと伝えています。

クラスには、鮮やかに「でございます」を使う学生がいますよ。「こちらが本日みなさんにご紹介します、●●でございます」などと言って、自分が見つけてきた便利なグッズを紹介してくれました。

この言語の世界にはそれぞれいろいろなバリエーションがあって、学習者たちはきっと迷うんですね。日本人が言っているものを拾ってきて、そこに貼り付けるわけなんです、その日本人でも使い方がずれているから困ること請け合いです。

さあ、みなさん！おじさんと一緒に迷いましょう！



子どもたちの継続的な学習を支える 仕組みづくりを



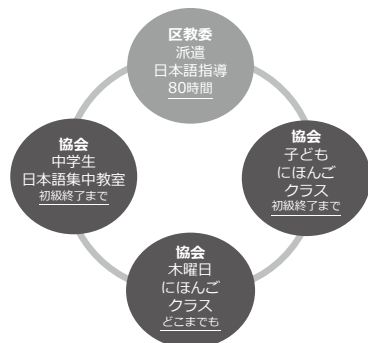
中野区国際交流協会（ANIC）

常務理事 遠藤 由紀夫

中野区国際交流協会は、2002年から、外国につながりのある小中学生を対象に、日本語ボランティアの協力を得て日本語指導を行っています。当初は、中国出身の子どもたちが多かったのですが、20年を経て子どもたちの文化背景も多様化を増し、近年はネパールについて外国で生まれ育った日本国籍の子どもたちが増えてきています。彼ら一人一人の状況を理解しながら、適切な日本語指導へと導けるよう日々取り組んでいます。

1. つながる日本語指導

中野区教育委員会が実施している「日本語適応事業」では、中野区国際交流協会から日本語指導員を推薦し派遣しています。子どもたちは1人80時間、自分の学校で、いわゆる取り出しの形で日本語を学ぶことができます。



また、中野区国際交流協会の実施している「子ども日本語クラス（火・木曜日）」「中学生日本語集中教室（水・金曜日）」でも、日本語を学ぶことができます。更に学びたい子どもたちは、木曜夜の大人の日本語講座で学習できます。

これらはすべてつながっており、一つの教科書、同じ指導方法で無駄なく学ぶことができます。集中的に学習することで、最短の時間で効果が見えてくるのが、子どもたちのやる気にもつながっています。

2. システムを支える指導者の養成

子どもたちに日本語指導を行うため「日本語ボランティア実践講座（全15回）」「日本語指導員養成講座（全6回）」を毎年実施し、指導者の育成にも力を注いでいます。

生活者として来日した場合、「きちんとした日本語」を学ぶ場は非常に限られてしまいます。また、子どもたちの場合は、自分の意志で来日した人は、ほとんどいないでしょう。受講生にはそのような背景も理解していただきながら、日本語を日本語で指導する方法を実践的に学び、子どもたちへの指導につなげてもらっています。講座終了後も、引き続き指導方法について学べるブラッシュアップ講座も用意し、指導力向上を図っています。

3. 中学生日本語集中教室

2020年7月コロナ禍で、感染対策を十分にしながら、子どもたちの学びを止めないためにスタートしました。当時、大人を対象とした日本語講座はしばらく休止状態となりましたが、時間が勝負の子どもたちにとって5か月の空白期間がのちの進学に大きな影響を及ぼすことになるため、心配もありましたが開講するに至りました。

この教室の大きな特徴の一つが、学校の許可を得て授業時間内に中野区国際交流協会で学ぶということです。日本語が十分でない子どもたちはもちろんですが、小学生の時に「日本語適応事業」で日本語学習を80時間して、その後継続的に学ぶことができなかった子どもたちを、再度すくい上げることができます。日常会話はある程度できるようになっているけれど、読み・書きが学齢相当に達していない子どもがもう一度日本語を学ぶチャンスを学校・保護者と連携しながら提供し、本人が自覚をもって学び進学も意識できるように声をかけていきます。毎年11月には「日本語が母語でない親と子どものための高校進学説明会」を実施し、日本の高校進学について母語で情報提供する場を設け、早い段階から保護者の方にも理解を促すようにしています。



小学生・中学生は初級の日本語をできるだけ早く修了し、学校の授業についていけるように日々指導しています。しかし本来、言語の学習に終わりはありません。初級の次は中級・上級を目指してほしいですし、実際に就職するとなると上級レベルの日本語力を求められます。その時は、中野区国際交流協会の大人の日本語講座で学習することができます。日本語を使って自立できるまで、継続的な日本語学習ができるように、地域で育った子どもたちを応援つづけています。

コミュニティとともに歩む 学習支援

KUNIFA日本語サポート

吉村 多恵子

国立市公民館では1989年から日本語講座が開かれ、私は1993年に開講した「日本語教授法入門」がきっかけで日本語のボランティアとして活動を始めました。その後学習者の方からの相談を受けて一緒に保育園や小・中学校に行き、話を聞く体験を重ね、文化もシステムも違い、言葉も通じない国に来た子どもたちの学習の大変さを身をもって感じました。素直で賢い子どもたちが勉強についていけず、精神を病んだり帰国してしまったりしているのを見て、この子たちの本来の力を伸ばしてあげたい、それが延いては日本のためにもなるとの思いで、個別に勉強を見たり仲間を誘って勉強の場を作ったりしてきました。公民館の学習支援教室設立に関わったり地域の学習支援教室にも参加してきたりもしましたが、それらが日本人主体となってきたため仲間と一緒に細々ながら外国ルーツの子どもたちのための教室を続けていました。

サポートのヒントを求めて移民大国EUの移民二世の教育に関する本を読んだとき、すべての人に平等な機会を与えるという概念に基づく“移民の社会統合”という言葉に出会いました。移民政策を教育だけでなく労働市場、住居や宗教、法律分野などすべてを含めた視点で見ていくべきというもので、2004年には基本的な枠組みとして移民統合政策指数（MIPEX）が生まれています。しかし当のEU各国でも社会情勢のみならず移民たちの出自、目標、当該国の制度など、とても複雑な要素が絡み合って政策がころころと変わり、新しい活動が生まれたと思うとすぐ消えてしまったりします。そんな中でも途切れることなく続けている活動は、地域の人たちがしっかりした理念をもって支援しているところだということも見えてきました。外国につながる人たちの学びを支えるのはコミュニティの力ではないかと思えたのです。

国立にも外国人就労者が多くなり子どもたちも増えてきました。2019年には社会福祉協議会の方が私達の教室にも視察に来てくれました。社協でも問題意識をもって地域調査や視察を重ねていたようです。その後、子どもたちが地域とつながる居場所となり市民や学生の地域参加の場としての教室の運営、この事業を通し

て地域にダイバーシティを広げるという目的を掲げて、学習支援教室を立ち上げる準備を始めてくれました。地域を重視しコミュニティの力を活用する取り組みです。

2021年のボランティア募集には70名が応募。地域のたくさんの方々が子どもたちの存在に気付くことだけでも一歩前進、多人数の応募はとても心強かったです。そして応募者に対して講師の先生と教育委員会の方によるなぜ必要かどんなことができるのかなど国立の現状と、社協としてどのような取り組みを考えているかなどの説明の会を開いたうえ改めて希望者を募り、6月から7月に4回のボランティア養成講座を開催。講師は学習支援の経験も豊かで3冊の「中学生のほんご」を編集された志村ゆかり先生でした。

2021年8月にお試し講座を開催、事前の講習で培われたのかボランティアの皆さんの心を込めて子どもたちに向き合っている姿がまぶしく見えました。9月よりコミュニティに根差した外国人のための学習支援教室「ひまわり」が開設されました。毎週水曜日15:30~18:40（小・中高生の二部制）場所はくにたち福祉会館分室で、一年を経た現在未就学児2名、小学生11名、中学生9名、高校生1名、総勢七か国23名となりすっかりなじんできました。付き添ってきた母親が別室で日常会話を楽しむこともできます。月に一回はスタッフによる楽しいイベントがあり、時にお母さんたちにも手伝ってもらいながら全員一緒に楽しむ時間も設定されています。ボランティアへの研修も随時行われています。

社協の方々の心強いサポートのもとで多様な国の子どもや親たちが地域の人たちと自然に交流でき、輪がどんどん広がっていくのを実感しています。ここで育った子どもたちが、コミュニティを、また日本を強くする力になることを願っています。



教室風景



豆まき

●第30回定期総会のお知らせ

2023年5月21日（日）にTNVN第30回定期総会を行います。新型コロナウイルス感染予防のため、第29回定期総会までは事前にお送りした資料をご高覧頂き、インターネットを利用して各議案に対し賛否表明をしていただきました。

今回は、同日13時よりZOOMを利用したオンライン総会を行うことと致しましたので是非ご参加ください。3月13日（日）からマスク着用が任意になり、5月8日（月）からは感染症法上の分類が引き下げられることが予定されております。環境の変化を踏まえ対面での総会も検討しましたが、諸般の事情を考慮しオンラインでの総会と致します。

尚、議決権の行使方法につきましては、昨年同様、インターネット利用による賛否表明をお願いします。

詳細は別途お送りする第30回定期総会のお知らせをご覧ください。総会后特別講演会を予定しております。

●2022年度事例報告会2回目を終えて

TNVNでは、昨年10月に会員団体向けに事例報告会をオンラインで初めて開催しましたが、その2回目として、3月8日に二つの団体による活動報告会をしました。

渋谷区スペース・アイの鈴木恵司さんには団体紹介に続いて、「コロナ禍での日本語会話ボランティア」についてお話しいただきました。コロナ禍での教室休止と再開の繰り返し、オンライン方式の取り入れ、そして3密を避けたイベントの工夫などを、豊富なデータと写真で報告していただきました。そして、二つ目の団体事例として、八王子国際友好クラブから武田あき子さんが団体組織の紹介の後、「NHK NEWS WEB EASYを使った オンライン日本語サポート活動」の報告をしてくださいました。2人の学習者（漢字圏非漢字圏各1名）に週1回2時間、一緒にZoomで1年間継続した支援内容を、毎回の組み立てから漢字の扱いの工夫、そして継続学習の効果を具体的にお示しいただきました。

参加人数は約30人で画面上での率直なやり取りができ、報告くださったお二人に質問全てにお答えいただく時間も足りなくなってしまうほどでした。

事例報告会は来年度以降も継続して実施したいと考えておりますので、会員の皆さまのご協力とご参加をお願いいたします。



東京日本語ボランティア・ネットワーク (TNVN) は都内のボランティア日本語教室のネットワークで、会員からいただく会費で運営している民間の団体です。会員は日本語学習支援活動を通して、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人を、隣人として支援しています。又、TNVNは会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

◆日本語ボランティア相談窓口

日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフが応えます。メールでお問合せください。

*対面でのご相談にもお応えします。
ご希望の方は、以下メールでご予約の上、おいください。

日時：毎週金曜日午後2時～4時
(祭日休み)

場所：東京ボランティア・市民活動センター
JR・地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線)出口B2b)
飯田橋駅下車
セントラルプラザビル 10Fロビー

◆郵送先

〒162-0823
東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス No.4

◆E-mail : office@tnvn.jp

◆URL : https://www.tnvn.jp/

◆郵便払込

口座番号：00100-1-719259
加入者名：東京日本語ボランティア・ネットワーク

◆会員数 (2023年3月31日現在)

正会員：84団体
協力会員：14名
賛助会員：5団体

◆編集／大野 敏宏、岡田 美奈子、小野 美恵子、仁村 議子、林川 玲子、山内 眞理、渡辺 紀子

◆レイアウト／美巧社

「感想を是非、お寄せ下さい」
<https://forms.gle/pkRnP15dfzNyECRk9>



118号アンケート

column

[Pay Pay]

初級後半のグループで中国の若いお母さん2人を担当していた時のことです。その日は、レッスン開始時に会費500円を貰う日でした。Kさんが、500円玉で払った後、Oさんが一万円札を取り出しました。あいにく釣銭の持ち合わせがありません。「来週でいいですよ」と言いましたが、Oさんは申し訳なさそうです。すると、Kさんが500円玉をもう一枚取り出し、Oさんの分だと払ってくれま

した。二人は特に親しいわけではなく、日本語教室だけで顔を合わす仲なので、お金の貸し借りをして大丈夫かしらと心配でした。やがて、二人は中国語を喋りながらスマホを取り出し、慣れた手つきで何やら始めました。

「何してるの？」と訊いたら、Kさんが「Pay Payで500円もらっています」とのこと。若い二人の知恵に感心しました。(M.O)